

## 二、第五高等学校の「学徒出陣」

薄田千穂

第五高等学校における「学徒出陣」はどのようなものだったのか、本章では二つの史料から検討する。

なお、この時期の第五高等学校には文科と理科という課程があった。それがさらに外国語の選択によって、クラスに分かれる。英語を主とするクラスが甲類、ドイツ語を主とするクラスが乙類とされ、戦時編制時を別として甲が三クラス、乙が一クラスあった。また乙は、文科四組と呼ばれることもあった。本報告書では、例えば文科甲類三組を文甲三のように略記している。また、第五高等学校を五高と略記した箇所がある。

### (一) 『龍南会雑誌』第二五四号

『龍南会雑誌』は、第五高等学校の校友会誌である。第五高等学校の校友会は「龍南会」といい、明治二十四年に創設された。『龍南会雑誌』を編集していたのは、「龍南会」を構成していた部の一つ雑誌部である。雑誌部長は代々教授がつとめたが、雑誌の編集は雑誌部委員となった生徒が行った。明治二十四年一月二十六日に創刊され、昭和期の発行回数は、おおむね三回から五回であったが、昭和一九年六月一五日発行の『龍南会雑誌』第二五四号をもって休刊し

た。

二五四号には「壮行歌」「学徒出陣の記」が巻頭に掲載されており、他にも詩歌、寮報、編集後記など随所に学徒出陣・動員に関する内容が見られる。

「学徒出陣の記」によると、第五高等学校での壮行会は一〇月一日午後一時より、講堂で行われた。添野信校長の壮行の辞、職員代表竹原東一教授の挨拶、生徒総代森俊世理科代表幹事の挨拶のあと、「征く者を代表して」棧熊獅文科代表幹事が答辞を読んだ。

また、龍南会総務部が壮行歌を募集した。十数編の歌詞が寄せられ、上田英夫、高森良人、藤井外興ら三人の教授が選考を行った結果、文科一年四組の木庭立夫の歌詞が選ばれた。作曲は音楽部（主として理科二年四組高津幸弘）が担当し、壮行歌が完成した。発表会は一月一八日に開催された。

徴集者のなかには、入営後、第五高等学校の学友に手紙を書くものもあった。龍南会総務部は、市内の部隊を訪れ、学友先輩を激励慰問したと記されている。

ここには『龍南会雑誌』二五四号の中から、「答辞」「壮行歌」「短歌 学徒出陣」「寮報」を掲載する。

### ① 答 辞

天高く雲流る。悠久の自然を他に世界史は躍動す。その最中に我ら征く者にとりてかくも盛大なる壮行の会を開かれ、我らの感激大

なるものあり、我らこの感激を心に銘じ諸先生始め全龍南人の期待に背かざるの覚悟有らざるべからず。

あ、我ら征く、我等に三千年來、富士の高嶺を仰ぎみて元寇、日清、日露と幾多の国難に莞爾として散りゆきし祖先より伝へうけ今尚脈々と波打ち流る、大和民族の血汐あり、加ふるに此処龍南にて血涙もて培ひし剛毅の魂木訥の心あり。而して背後に龍南人諸兄との固き心の結びあり、我らこの鉄石心もて山嶽崩すべし海翻すべし。夷狄何する者ぞ。

我等未だ学終えず、業成らず。されど晴れて召さる日本男子の名譽何ものか之に過ぐ。惟ふに学は書室に籠り書籍にのみよるもの、之その本然の姿に非ず。自らの知とは自己の力により創成せられ築き上げられし

学的組織体形を言ふなり、之こそ自己の血となり肉となれる「生ける知」なり。悦ばしき哉、幸なる哉、我らに今真の学習の道を与へらる。

我等出陣の天爽快く晴れたる朝、坦々たる心のまま豊に微笑みて家門に立ち見送るらむ父母に、かく語らむ。「右手に劍とり、左手に筆捨つることなし。闘ひ且学ばむ。」と

諸氏しばし偲べ。或は愛機に打乗りて南溟の空玄冥しきりに荒れ狂ふ最中を雄々しく翹き、或は野菊咲き薫る曠野遙々と渴に苦しみつ、越えゆかむ。その頃、こ、龍南にては兄等孜々として学びに専心し、赤壁の城松の緑に映えて巖然全国を睥睨しあらむ。されど征くも残るも龍南に笈を負ひ多数先人によりて錦上更に花を添へられ

し剛毅木訥の精神に生くる者なり。我ら艱難に生きむ。

我ら敵弾被り先づ両脚もぎ奪はるれば、両手もて掻き進まむ。その両手更に飛び散らば、根限り体ゆすぶりに横転し、以て敵弾に肉迫せむ。身体敵弾に砕くれば齒に草かみ、鮮血にまみれ、骨砕け乱れて形とてなきこの軀を引きずり行かむ。遂に顔面に弾受け、口に物噛む力なく、進む能はず、生命絶つとも魂もて敵陣に飛びゆかむ、千万人と雖も我行かむ哉。

我に後顧の憂なし。龍南五高は光と永久に榮ゆるなり。我ら学園の内外道は異なれど、相呼応し以て光輝ある五高史を汚すまじ、而して大和民族永遠の発展に献身せむ。

さらば我ら征く。再び相まみゆることなからむ。されど七度生れて君恩に報ぜん哉。

最後に諸先生より戴きし御鴻恩に厚く謝しその御健康と将又諸兄の御多幸とを心より祈り、重ねて龍南人たるの自覚もて戦はむことを誓ふものなり。

蕪辞もて答辞となす。

さらば

昭和十八年十月十三日代表

棧 熊獅

② 壮行歌

作词 作曲 木庭立夫



壮行歌

(一)  
嵐吹き荒ぶ暗黒 一線の炬火を掲げて  
征け! 我が學友よ  
純剣は兎も右手に 願正の光放たむ

(二)  
傳統五十年こそぞ 民われの至情に燃えて  
征け! 我が學友よ  
五高魂兒等が胸に 生きぬきて火華と散らむ

(三)  
潮鳴らば嗚れいざや 若人の鮮血さゝげて  
征け! 我が學友よ  
我ら亦統執りもちて 戦線に兒と相見む

(四)  
光東より世界に 新しき理想を築く  
征け! 我が學友よ  
皇國を兒等擔へり 大東亞兒等を呼べり

③ 短歌

学徒出陣

文二ノ二 石丸 公

事しあらば捧げむ命時もよし徴集猶予いま廃止せらる  
天地のたゞならぬ中に学徒われら祝がむかなや徴集猶予廃止令  
数たのむ敵には数もて応ふべし青年学徒の起つときはいま  
今をおきてまた来む時はなかるべしこぞりて起たな日本の学徒  
大御代に新榮おこす幸ぞ振ひ立ち征けますらをの伴

④ 寮部報

戦塵

当番総代 七田 博

(前略)

戦陣

夏頃から噂されていた、学徒出陣は真実の事となった。大東亜戦争が苛烈なる段階に入つて、アツツ島玉砕、山本元帥の機上戦死等の発表があり、南太平洋の敵反抗が相当に激烈となった。現在この措置は実に当然の事であり、髀肉の歎に耐へなかつた若人は、時こそ来れと勇躍出陣して行つたのである。後に残つた者の口惜しさは言ひがたいものがある。

革新初年の生活を邁進し、あつた、我が習学寮にも、遂に出陣の命は下つた。古今未曾有の国際状況下にある国家は、古今未曾有の国内状況の変化は当然の事である。而してかくの如きの時代に生を受くる者、又何らか古今未曾有の生活をしなければならぬ。習学寮も改革された、而して未だその緒についた許である。この時にあたり、実に龍南史上嘗つてなき、習学寮出陣の命は下つたのである。

寮よりの出陣七名、実に名譽の第一陣である。既に覚悟は立派に出  
来ていた事であらうが、いざ寮を去りて、戦陣に赴かんとする、人々  
の心、感慨は如何。再び代表の出陣の辞を読まん。

「南肥ゆるこ、龍南の地に訪れし風雲急を告ぐ、鐘の音に送られて、  
今ぞ征く我等七名、習学寮の先陣を承り、諸君に先駆して今ぞ征く。  
男子無上の光榮なり。こ、に我等最後の大晚餐会を迎へ、和氣藹々  
たる大団欒の雰囲気に浸り、将又血湧き肉躍る壮行の辞を賜はり、  
我等が若き胸は至上の感激に打震ふ。」

顧みれば、笈を負ひて龍南の地に来りてより六月、この間大東亜  
戦争の調べは日に高なり、北海妖霧のいやこゆく。南溟雲は乱れ飛  
び、血風地を捲きて急を告ぐ、かゝる今日、我ら学びの道にいそし  
み得るは、之れひとへに大御稜威の力なり。試に思へ、对寮マツチ  
の華々しさを。これ我等五高生にして始めて満喫し得る快味なり、  
然れども我等こゝに日本の本の有難さを忘るべからざるなり。日本あ  
り。日本なくして何んの感激ぞ。今こそ全国民只陛下の赤臣として、  
打って一丸となり、国難打開に邁進すべきの秋なり。この秋にあた  
り、我等学徒動員を受けしは、当然の事にして、欣喜雀躍その極み  
なり。而して国家の隆替一にかゝりて、我等青年学徒の双肩にあり、  
その任たる極めて重く、道たる甚だ遠きを思ふ時、鉄腕自ら鳴るを  
覚ゆ。況んや吾等五高生なり、一死報国、尽忠の誠を致し、誓つて  
この大任を全うせん。

日の本に生き為に死す。憂国の熱情は沸々として我等が五体をめ  
ぐり、その姿は、球磨の流のいや早く、瀬音も高く白波の、岩に碎

けて咲くが如、熱あり、美あり、力あり。

而してこれなん我らが伝統、剛毅木訥の魂にして他あるなし。我  
ら今ぞ征く。この魂を身にしめて。而して今の心事たる、霽れたる  
秋の月の如し。さらば諸兄、目的は唯一つなり、麓の道は多くとも、  
同じ高嶺の月を見んと欲するものなり。最後に諸兄らよ、今一層自  
己の行くべき道を全うされ、かゝる大いなる歴史の創造に寄与され  
んことを切望して止まざる次第なり。」と。

男子の本懐、実にこれに過ぎたる者なからん。我等こゝに喋々せ  
ず。共に征く日を期せんのみ。

十二月一日といふ日。昭和十八年十二月一日は我等学徒にとつて  
実に忘れられない日である。この日を前にして、出陣の友は寮を去  
った。今静かに万感込めて、故山の父母に孝養を尽している事であ  
らう。惣代加田も故郷に帰っていた。十一月も末。正に感激に沸き  
立たんとする前夜、彼は一通の手紙を寮に投げ込んだ。

一読すれば彼の容貌豁然として、言々句々に表れた愛寮の至情は、  
人の胸を打たずには置かないであらう。

次にその手紙をのせる。

拜啓その後寮生諸兄には、愈々御壮健にて寮生活に御精進の御事  
と愚察仕候過日小生出立の砌は盛大なる御見送りを忝うし、厚く  
御礼申上候、降而小生無事帰省仕り、入営までの暫しが程を懐か  
しの故山に憩ひつゝ、身心共に御奉公の準備に余念なき次第に有  
之候間乍他事御休心被下度候、乍去懐かしの寮を離れて、故郷の  
我が家に、古色蒼然たる机に向ひて、筆執る心には、男子征く身



の未練には無御座候得共、轉た龍南生活を恋ふるの情去り難きも有之候、女々しき感傷とは存候も、暫しは瞑目、かの諸兄と共に学び談じ行ぜし寮生活の数々。果は共に食ひ、共に歌ひ、相共に乱舞せし思ひ出を、只美はしく頬笑ましく追想する次第に候。

想ひ今も尚かの美はしの杜蔭に、美はしく営まれある諸兄の生活に到り候ては、ひたすら習学寮よ汝が若人の生活に、永劫の幸あれと祈るのみにて候、斯くも美はしき龍南の杜より、斯くも美はしき憶ひ出を胸に秘め、斯くも美はしき友情に送られて、斯くも美はしき国の御戦にいで征く身の幸を顧みては、愈々、一死以て君恩に報い奉らんの決意を堅うすることに御座候

凡そ時艱にして義を思ふは、我ら龍南人の本領に有之候、今や戦局益々重大の様相を呈し、祖国日本の急を告ぐるは之正に、天下の中心生命を以て自負する我龍南の危機、然るに龍南の現状を窺ふに、その革新未だ充分の完成を見不申、必ずしも我らが樂觀を許す間敷き趣に候事、もとより惣代在任中、墮眠を貪り居候身の無責任に、後悔の徒らなる臍を噛むの次第に候得共、然れ共、又残りて習学寮を守らる、諸兄の御奮起に俟ちてその挽回を願ふの不甲斐なさを敢てせずんば堵んじ得ざる心中、克く御察し被下度候、今や我寮は惣代幹事諸兄の健在なりと雖も、畢竟寮を動かすは寮生諸兄の協力を存するものに候、諸兄既に生を習学寮に享け、寮に学ぶ限り、克くその寮生活に徹底せられよ、諸兄が寮に生活して、寮に関心なきは、則ち諸兄の自殺に等しかるべく、そは又、龍南人として、畏れ多くも、大君に對し奉る。不忠の儀

と御記念あれ、寮生活こそは諸兄の生命そのものに御座候へば、

常に寮を憂ひ、寮を愛さるべくと存候、常に愛して之に不満あらば、諸兄自ら満足なる寮生活を築かれよ、而して寮は行の道場に候、起床し、洗面し、礼拝し、食事し、入浴し、勉強し、議論し、就寝する悉く、日本人としての、龍南人としての行に非ざるは無之候、行なれば即ち苦、須らく惣代幹事を中心として、四百の同志あらゆる妥協同情を排し、自らに對し、友に對して飽くまでも厳格なる愛の鞭をふるひ、以て苦しくも亦美はしき行の一路を慕進被下度念願致居候、斯くしてわが習学寮は友情の泉、尊皇の牙城にして、その光榮の永劫に朽つるなく、祖国亦危きを知らずといふものにて候。又々愚もつかぬ説教を並べし段御海容被下度候最後に不相變の駄作數首を親愛なる寮生諸兄に捧げ、諸兄の御奮勵と、習学寮の光榮を祈りつ、擱筆仕候

武夫原に生き武夫原に死すといふ杜の男の子らいざ歌へかし

秋の月静かに澄みてとことばに乱る、勿れその杜の上に

美はしの珠し求めつ苦の淵にさまよう魂に幸あれよかし

十二月二十四日伊勢の故郷にて 加田 勉

習学寮生諸兄机下

この手紙を読んで私は彼との別れを思ひ起す。馱頭に於ける武夫原と海ゆかばの歌に送られつ、熊本を立つた彼、上熊本まで同乗した惣代の手を各々握って、じつと握りしめた彼の手、じつと見返す目、その目には薄すらと涙さへ浮かんでいた。しつかりやってくれ反対に励まされて唯頷いただけ。加田もそれ以上は何も云はなかつ



二. 第五高等学校の「学徒出陣」

昭和一九年九月二日	文科二年三組	暁第二九五三部隊岩見部隊	一
昭和一九年九月一日	文科二年四組	武山海兵団分団学生隊カ三二一	一
	文科二年一組	橘第一四一六〇部隊	一
	文科二年四組	武山海兵団	一
	文科二年三組	(横須賀留置) 武山海兵団学生隊カ二一	一
	文科二年二組	三重海軍航空隊	一
	文科二年一組	三重航空隊	一
昭和一九年八月八日	文科三年四組	熊谷陸軍飛行学校(桶川教育隊)	一
昭和一九年八月一日	文科一年三組	(空欄)	一
昭和一九年一月二〇日	文科二年三組	熊本市西部第二四部隊	一
	文科二年二組	即日帰郷(召集延期)	一
	文科三年三組	即日帰郷(召集延期)	一
	文科三年二組	病後故、徴兵延期許可	一
(昭和一八年)	文科三年一組	(来年度昭和一九年適合)	一
	文科二年三組	広島県佐伯郡大竹町大竹海兵団	二
昭和一八年二月二一日	文科二年一組	第一二教班	一
	文科二年三組	佐世保第二海兵団富永分隊	一
	文科二年二組	佐世保海兵団	二
昭和一八年二月一〇日	文科二年一組	佐世保第二海兵団	一
	文科二年二組	佐世保鎮守府第二海兵団	一
	文科二年三組	佐世保第二海兵団	一
昭和一八年二月九日	理科二年二組	横須賀第二海兵団	一
	文科一年四組	西部第八部隊第一中隊五班	一
	文科一年三組	西部第九部隊齊藤隊高屋敷班	一
	文科一年二組	西部第八〇六二部隊	一

昭和一九年九月一〇日	理科二年二組	台湾軍(現役兵として) 即日帰郷	一
昭和一九年九月一〇日	文科二年一組	熊本市西部一六部隊大塚隊	一
昭和一九年九月一五日	文科二年三組	堺市鳳南町鳳郵便局気付橋台一四一五	一
昭和一九年九月三〇日	文科二年一組	四部隊夕隊	一
	文科二年三組	中部第二三部隊柏隊	一
	文科二年一組	大竹海兵団入団(旅順海軍予備学生教育部)	一
	文科二年三組	熊本陸軍予備士官学校/旅順海軍予備学生教育部	一
	文科二年四組	旅順海軍予備学生教育部第一〇分隊	一
(昭和一九年)	文科三年一組	旅順海軍予備学生	六
	文科三年二組	(海軍予備学生)	七
	文科三年三組	(海軍予備学生)	三
	文科三年四組	(海軍予備学生)	四
	文科二年一組	(現役兵入営)	一
	文科二年二組	(海軍予備学生)	一
	文科二年三組	(現役兵入営)	一
	文科二年四組	(現役兵入営)	一
昭和一九年一〇月一日	文科二年二組	久留米野砲五一部隊	一
昭和一九年一〇月一〇日	文科三年一組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	五
	文科三年二組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	五
	文科三年三組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	七
	文科三年四組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	二
	文科二年二組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	一
	文科二年一組	久留米第一予備士官学校(特別甲種幹部候補)	一
	文科二年三組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	五
	文科二年四組	熊本陸軍予備士官学校(特別甲種幹部候補)	一





二. 第五高等学校の「学徒出陣」

昭和二〇年三月二日	文科二年三組	西部第七二部隊	一
昭和二〇年三月二〇日	文科二年一組	暁第八〇六一部隊堀江隊	一
	文科二年三組	暁第八〇六一部隊堀江隊 (空欄)	一
昭和二〇年四月五日	文科二年四組	暁第八〇六一部隊	二
	文科二年四組	護南第二二四〇三部隊	一
	理科一年六組	護南第二二四〇三部隊土永隊	一
		西部第六一部隊	一
昭和二〇年四月八日	理科一年二組	西部第六一部隊	一
昭和二〇年四月二〇日	文科二年一組	護西二二八〇部隊梓隊	一
昭和二〇年四月二一日	文科二年二組	西部第一四七部隊	一
	理科一年五組	西部第一四八部隊	一
昭和二〇年五月一五日	文科二年二組	西部第六〇部隊	一
	文科二年四組	西部第一五一部隊	一
昭和二〇年六月一〇日	文科二年イ組	久留米西部第一四八部隊	一
	文科二年イ組	西部第六七部隊田中隊	一
昭和二〇年六月一六日	文科二年口組	西部第一四八部隊	一
	文科二年イ組	久留米西部第一四八部隊	一
昭和二〇年七月一五日	文科二年一イ組	(空欄)	一
		慧第八〇六三部隊米澤隊	一
昭和二〇年七月一八日	文科二年イ組	護弘第二二八六九部隊	一
昭和二〇年七月二七日	文科二年乙組	西部第六一部隊	一
	文科一年口組	西部第二一部隊	一
昭和二〇年八月八日	文科二年口組	久留米第一予備士官学校(特別甲種幹部候補)	二
(昭和二〇年)	文科二年一組	中支派遣冬三五四三部隊荒木泰キノ (三)	一
		満州第四八四〇部隊	一
		西部四八部隊歩兵(久留米市)	一
	文科二年二組 (空欄)		三
	文科二年三組 (空欄)	満州第一九五軍事郵便所気付 第七〇 四〇部隊大川畑隊	一

文科二年四組(空欄)	東部第七四部隊山隊	三
文科二年口組	東部第三六部隊鈴木隊	一
文科一年四組(空欄)		一

注 『徴集者名簿』より作成。入営期日の( )は推定、入営部隊名の(空欄)は未記入、その他の( )は欄外の記入事項を移動したもの。

昭和一八年の徴兵延期停止による入隊者は、一二月一日に陸軍が三七人、一二月一〇日前後に海軍へ一人である。また、一カ月後に特別志願制度により陸軍へ二人が入隊した。

前述したように、昭和一八年徴集者の場合、徴兵検査の時に徴兵官に対し陸・海軍の志望申告ができたものの、多くは陸軍に振り分けられ入隊した。第五高等学校では、配属将校との昭和一八年六月に学校教練の査閲で査閲官との摩擦があり、陸軍に対しての反感が高まっていた。志望申告のとき、海軍志望が多かったことは想像できることであるが、全国的にも、多くの学生が海軍を志望し、徴兵官の気分をひどく害したという事例が多くみられた。

また、昭和一九年には、海軍予備学生、陸軍特別幹部候補生が募集されており、昭和一九年九月三〇日に海軍予備学生二一人、昭和一九年一〇月一〇日に陸軍特別甲種幹部候補生三四人、昭和二〇年一月一〇日に陸軍特別甲種幹部候補生一九人が入営している。昭和一九年夏以降の徴集者一七四人に対して、海軍予備学生の割合は一〇％、陸軍特別幹部候補生は三〇パーセントに達する。

なお、この『徴集者名簿』に名前があるが、徴集年月と卒業年月の関係から第五高等学校からの徴集ではなく、大学在学中に徴集さ

れたという認識をもつ卒業生も多数いることが、一昨年実施した「戦前・戦後の第五高等学校についての調査書」による調査で判明している。

表4 クラス別入営者数  
昭和一八年度

クラス	在籍数	徴集人数	徴集割合	陸軍	海軍	延期・不明
文科一年	一七〇	八	四・七	五	一	二
文科二年一組	三七	八	二一・六	六	二	〇
文科二年二組	四一	七	一七・一	五	二	〇
文科二年三組	四〇	一五	三七・五	九	六	〇
文科二年四組	四七	一三	二七・七	一三	〇	〇
文科三年	一四二	四	二・八	〇	〇	四
理科一年	二七四	〇	〇・〇	〇	〇	〇
理科二年	二二八	一	〇・四	一	〇	〇
理科三年	一五〇	〇	〇・〇	〇	〇	〇
計	一一二九	五六	五・〇	三九	一一	六

昭和一九年度

クラス	在籍数	徴集人数	徴集割合	陸軍	海軍	延期・不明
文科一年	四四	四	九・一	四	〇	〇
文科二年一組	四四	二二	五〇・〇	一八	二	二
文科二年二組	四一	一五	三六・六	一三	二	〇
文科二年三組	四六	二四	五二・二	一七	六	一
文科二年四組	四三	二四	五五・八	二〇	二	二
文科三年	—	四九	—	二九	二〇	〇
理科一年	三四三	〇	〇・〇	〇	〇	〇
理科二年	二六二	二	〇・八	一	〇	一
理科三年	—	〇	—	〇	〇	〇
計	八二三	一四〇	一七・〇	一〇二	三三二	六

昭和二〇年度

クラス	在籍数	徴集人数	徴集割合	陸軍	海軍	延期・不明
文科一年	一一七	六	五・一	四	〇	二
文科二年	一〇九	二四	二二・〇	一七	〇	七
理科一年	四二二	四	一・〇	四	〇	〇
理科二年	三五八	〇	〇・〇	〇	〇	〇
計	九九六	三四	三・四	二五	〇	九

注 在籍数は各年度『成績表』、徴集人数は『徴集者名簿』による。  
昭和一九年度の文科理科三年の在籍者数は不明。

表4は、クラス別入営者数を表にしたものである。第五高等学校では、クラスごとに教室が決まっており、授業の際には教員が教室におもむき、授業をする現在の中学校・高校の方式をとっていた。そのためクラスのつながりが強く、壮行会などはクラス別に行なわれた。徴集後、空席ができた教室の雰囲気を推し測ることができよう。

表5 入学年別入営者数

入学年	科	入学者数	徴集者数	徴集者の割合(%)
昭和一九四〇	理	一四九	三	二・〇
	文	一四七	〇	〇
昭和一九四一	理	一五〇	一六	一〇・七
	文	一五一	〇	〇
昭和一九四二	理	一五七	八八	五六・一
	文	二二九	三	一・三
昭和一九四三	理	—	—	—
	文	—	—	—

二. 第五高等学校の「学徒出陣」

一九四三	文	一六一	一〇二	六三・四
昭和一八年	理	二二二	〇	〇
一九四四	文	三六	九	二五・〇
昭和一九年	理	三一八	〇	〇
一九四五	文	一〇九	三	二・八
昭和二〇年	理	三七一	四	一・一
不明		—	二	—
合計		二二二〇	二二三〇	一〇・四

注 『徴集者名簿』『五高同窓会会員名簿 百周年記念号』より作成

表5では徴集者の在籍者に対する割合を一覧にした。

昭和一五、一六年の卒業生に関しては、五高の在籍者を対象にしているので少ない数になっているが、卒業したあと大学の文系に進学し、大学から徴集されているため、徴集者は最終的に一〇〇パーセントに近い数になると思われる。

第五高等学校からは、昭和一七年度入学の文科では、五六・一%、昭和一八年入学の文科では六三・四%と半数以上が徴集されている。

徴集者の入隊後については五高の史料では把握できない。当事者からの情報に頼るほかないが、得られる情報は年々少なくなっている。戦没者に関して数人の情報があるほか、消息を把握できていない卒業生が多く、引き続き情報の収集が必要である。

参考文献

『学徒出陣と学徒動員―制度と背景―』 福間敏矩 一九八〇年

『海軍飛行科予備学生・生徒史』海軍飛行科予備学生・生徒史刊行会

一九八八年

『学徒出陣の検証』 蛭川壽恵 『日本歴史』 第五七八号 一九九六年

『東京大学の学徒動員 学徒出陣』 東京大学史資料室編 一九九七年

『学徒出陣 戦争と青春』 蛭川壽恵 吉川弘文館 歴史文化ライブラリー

四三 一九九八年

『海軍予備学生の思想・素描』 山口宗之 『久留米工業大学研究報告』

No.二二 一九九八年

『「高校生出陣」の検証』 木崎弘美 『日本歴史』 第六六四号 二〇〇三年

『第三高等学校における「学徒出陣」』 西山伸 『京大文書館研究紀要』

第六号二〇〇八年